

〈資料〉

関西学院大学図書館所蔵
J.S. ミル自筆書簡 (II)

Thirteen Letters of John Stuart Mill
in possession of Kwansei Gakuin
University Library (II)

井上琢智

JEL : B15, B31

キーワード : J.S. ミル、自筆書簡、R.S. クリー、E.B. イーストウィックあるいは W.J. イーストウィック、H. ハリソン、L. ハント、C.E. ローリングズ、H. リープ、S. スターン

Keywords : J.S. Mill's Thirteen Autograph Letters, R.S. Cree, E.B. Eastwick or W.J. Eastwick, H. Harrison, L. Hunt, C.E. Rawlings, H. Reeve, S. Sterne, Six Unidentified Correspondents

関西学院大学図書館は、その図書・資料蒐集の過程で多くの経済思想家の手稿や自筆書簡を蒐集し、それら資料を利用した研究成果を公表してきた。¹⁾

J.S. ミルの自筆書簡の場合、文部科学省私立大学等研究設備費等補助金 (2005年度) で購入した ‘A Collection of Books & Manuscripts of Economists :

1) 例えば、以下のものがある。Toshihiro Tanaka (ed.), “The Correspondence of John Bates Clark, written to Franklin Henry Giddings, 1886-1939,” in *Research in the History of Economic Thought and Methodology American Economics*, ed. Warren J. Samuels, 2000, pp. 1-245. Takutoshi Inoue (ed.), *J.S. Mill's Journal and Notebooks of a Year in France, May 1820-July 1821*, 2014.

From Adam Smith to J.M. Keynes' と題するコレクションに含まれていた J.S. ミル自筆書簡 3 通に加えて、これまで機会あるごとに蒐集に努めてきたミルの自筆書簡の内、紹介する機会のなかった書簡の合計 14 通のミル自筆書簡を「関西学院大学図書館所蔵－ J.S. ミル自筆書簡－」として翻刻・紹介した。²⁾

他方、2001 年以降、関西学院大学図書館は「デジタルライブラリー」の構築を検討しはじめ、デジタル化の目的を「資料情報発信というよりも学術研究の世界的な交流」と位置付け、「高精密画像」等により諸史料・資料を提供することとした。まず、2004 年に『関西学院新聞』、2005 年にはヨハネス・グーテンベルクの「42 行聖書」の一部 (2 葉 4 頁)、エラスムス校注『ギリシャ語新約聖書』、ベッテンハイム訳『使徒行伝』などの日本語聖書を JPEG を用いて公開した。2006 年には『兵庫県漁具図解』、2009 年には「与謝野晶子による丹羽安喜子短歌草稿添削」、2010 年には「明治・大正の文学者たちの書簡と草稿」、2012 年には古文書史料「灘の酒作り」、2013 年には「明治政治史関連書翰」、2014 年には大坂の質屋「櫛原家文書」を公開してきた。

このような研究史料・資料のデジタル化の方針にしたがって、2007 年にはミル父子、J. ベンサム、A. スミス、W. S. ジェヴォンズなどの「経済思想家の手稿と自筆書簡」を公開した。加えて、2008 年には「クラーク＝ギディングズ書簡」、2011 年には J. S. ミル、R. マルサス、L. ワルラス等の書簡が追加された。³⁾

さらに、関西学院創立 125 周年記念事業で購入された「H.S. フォックスウェル文書」約 24,000 点が、2016 年 4 月から、この「経済思想家の手稿と自筆書簡」データベースに追加されることになっている。

今回、翻刻・公表する関西学院大学図書館所蔵の J.S. ミル自筆書簡 13 通⁴⁾

2) 井上琢智「関西学院大学図書館所蔵－ J.S. ミル自筆書簡－」関西学院大学『経済学論究』第 65 巻第 2 号 (2011 年 9 月、173-201 頁)。

3) 今村太朗「デジタルライブラリーの構築あれこれ」関西学院大学図書館報『時計台』No.85、2015、38-41 頁。

4) 現時点で関西学院大学図書館は、J.S. ミルの書簡 47 通 (今回紹介する 13 通の書簡の他、なおも紹介できていない 3 通の書簡を含む。)、J.S. ミル宛書簡 (John B. Whitehead および J.Bentham) 各 1 通、H. テーラーがミルの代筆した書簡 1 通を所蔵している。所蔵されてい

は、これまで紹介されてこなかった書簡である。⁵⁾

るにもかかわらず、今回も紹介できない書簡は、以下の 3 通である。

- ① [Letter] Dec. 6, 1844 : J. S. Mill to [John] Robertson (081.128.207)
- ② [Letter] Oct. 2, 1863 : J. S. Mill to [Thomas Hare] (081.128.206)
- ③ [Letter] July 29, 1868 : J.S. Mill to the editor of the *Birmingham Post* (081.128.203)

これらミルの書簡 47 通の書簡のうち、*Collected Works of John Stuart Mill* (1963-91, Toronto Press, 33 vols. [以下、*Collected Works of John Stuart Mill* を CW と The Early Letters of CW を EL と、Later Letters of CW を LL と、Additional Letters of CW を AL と略す]) の EL および LL に収録されているものは 12 通、AL に関西学院大学図書館所蔵として収録されているものは 6 通、EL, LL, AL にも収録されていないものが 29 通である。

また、これら 50 通のミル関連の書簡のうち、すでにデジタルライブラリーで公開されている書簡は 31 通であり、他に上記ミル宛て書簡 2 通と代筆書簡 1 通も公開されており、計 34 通であり、今回本稿で紹介するミルの書簡 13 通も近々公開することになっている。

- 5) 今回紹介するミル書簡集番号【LL, no.1412】および【LL, no. 1431】については、すでに *Collected Works of John Stuart Mill* (1963-91), Toronto Press, 33 vols.) に収録され、注も付されているため、翻刻の相違以外の翻刻者注を付さない。また、翻刻文中のカッコ (【EL, no.】 【LL, no.】) 内の数字は、WC の書簡番号であり、アルファベットはその枝番である。なお、手書き書簡からの翻刻については、関西学院大学図書館運営課職員のご協力を得ました。記して深く御礼申し上げます。

[EL, no. 198A] ⁶⁾

To L. Hunt⁷⁾

India House

Wednesday

My dear Sir,

The forthcoming number of the L. & W. review⁸⁾ will appear about the 20th of next month, & I wish very much that it should contain an article of yours. Could you undertake one & what should you think of such a subject as the “Heads of the People” & the French work which is appearing in imitation of it. —

Ever yours truly

J.S.Mill

Leigh Hunt Esq.

6) *The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848*, ed. by Francis E. Mineka, (CW, vol.XII, [1963] 1964 & vol.XIII, 1963) に収録されているミルのハント宛書簡は以下の通りである。なお、*Additional Letters* (1991) にはハント宛書簡は含まれていない。① Letter 198 (March 13, 1837; vol.XII, 以下、⑤までは同巻所収)、② Letter 199 (March 15, 1837)、③ Letter 202 (April 6 (?), 1837)、④ Letter 210 (July 7, 1837)、⑤ Letter 224 ([Nov. 20, 1837])、⑥ Letter 240 (11 May, 1838; vol.XIII)、⑦ Letter 271 ([Feb. 12, 1840] : vol.XIII) である。

ミルにハントを紹介した一人は、ミルから多大の文献上の援助を受けて大著『フランス革命史』(1837) を書いた T. カーライル (山下重一訳註『評注 ミル自伝』御茶の水書房、2003、201 頁注 97) であり、それを示す書簡は、1932 年 12 月 27 日の Letter 64 (CW, vol.XII, p.135) である。この書簡で「いろいろな理由から、あなたの覚書を L. ハント [論文] の端書きとしては使っていません。… その覚書は彼のもとへ送られています」と書いている。他方、W.J. フォックスの “The Poetical Works of Leigh Hunt” (*The Monthly Repository*, vol.VII, March, 1833) を読んだミルは、1833 年 3 月 1 日のフォックス宛 Letter 69 (CW, vol.XII, pp.142-43) で「あなたは L. ハントを買いかぶりすぎている」と書いており、ミルがハントをそれほど高く評価していないことが分かる。その結果、1833 年 4 月 11 日もしくは 12 日のミルのカーライル宛 Letter 72 (CW, vol.XII, p.152) で「[哲学的急進主義の] 党派を運用し、楽しみ、知人の数を増やすというよりむしろ制限したいので、私は絶対に必要だとは考えてはいませんが、あなたが私に L. ハントを紹介しようとしてくれる機会を利用しようと思っています。

彼は知るに値し、そのうちそのような時がくるであろう」と書いた。まさに新しい雑誌の刊行がミルら「哲学的急進派」の党派間で話題になり初めて時期であった（注8を参照のこと）。

このような経緯をへて、ハントの *London and Westminster Review* 最初の論文“Lady Mary Wortley Montagu” (vol. 5 and 27, April 1837, pp.130-64) をめぐってミルとカーライル、ハント間で書簡が交わされる。1837年2月23日のミルのカーライル宛 Letter 196 (vol. XII, p.328) で「ハント氏の論文は3月12日より遅くない時期に出るであろう」と書いたが、1837年3月13日のミルのハント宛 Letter 198 (vol. XII, p.330) で「あなたの論文草稿を…今まさに印刷しようとしている」と書いた。

さらに続く1837年3月15日のミルのハント宛 Letter 199 (CW, vol. XII, p.330) で「私の手紙で喜んでもらえたとなれば、…あなたがくれた草稿が私たちにとって非常に価値あるものであるが、それを別にしても、私にとっても価値あるものであることは確かである」と、この論文の掲載が著者のハントはもちろん、ミルとその仲間にとっても評価の高いものであった。なお、この書簡でハントが使うペンネームを示す文様をミルが確認している。事実、この論文も含めて他の論文にもこの文様が使われている。

続く1837年4月6(?)日のミルのハント宛 Letter 202 (CW, vol. XII, p.332) で、ハントがミルに送った校正に関する覚書に感謝しつつも、「ただちにそれを認めるだけの時間がない」と書いた。さらに、ミルがハントの論文の1文だけを削除したことを認めてくれたと書いている。このように、ミルはハントの論文の実質上編集者の役割を果たしている。このハント論文の校正・印刷・公刊の過程を示す書簡の最後は、『ロンドン・ウェストミンスター・レビュー』の5巻(通巻27巻)が出版された後の1837年7月7日のミルのハント宛 Letter 210 (CW, vol. XII, p.341) である。この書簡で、ミルはハントの論文の抜き刷りがあなたのところに届いていないのではとの危惧を示している。

このようにハントの *London and Westminster Review* 最初の論文“Lady Mary Wortley Montagu”の出版の過程で、この書簡はミルからハントへ送られてものと考えられる。この書簡の冒頭で「次の月の20日に [*London and Westminster Review*] の近刊が出版されるだろう」と書いていること、さらに実際に4月に公刊されたことから考えると、この書簡は3月にミルがハントに出したことがわかる。さらに、1837年3月13日のミルのハント宛 Letter 198 で「印刷開始」を告げていることから考えると、この書簡は3月13日以降のものであり、3月15日のミルのハント宛 Letter 199 でハントがミルの手紙を受け取り、喜びを表しているが、ハントを喜ばせた手紙が、おそらくこの書簡であると考えられるので、この書簡の日付は、3月14日の可能性が高いと思われる。

なお、この論文掲載以降、ハントは以下の論文を同誌に掲載した。

- (1) “The Tower of London,” vol.7 and 29, August, 1838 pp.433-461. See Letter 240 (CW, vol. XIII, p.417)
- (2) “New translation of the Arabian Nights,” vol.33, Oct. 1839, pp. 101-137.
(W.E.Houghton and E.R. Houghton (ed.), *The Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900*, vol.III, 1879, pp. 589, 591, 592).
- 7) James Henry Leigh Hunt (1784-1859) はイギリスの随筆家、詩人。急進的な新聞 *Examiner* を1809年に、次いで *Reflector* を1810年に創刊し、当時の摂政を侮辱した罪で投獄。刑務所内でも前紙の編集を続け、バイロン (G.G. Byron, 1788 -1824) やムーア (T. Moore,

1779-1852)、ラム (W. Lamb, 1779-1848) など同情者の訪問を受けた。のちに、キーツ (J. Keats, 1795-1821) とシェリー (P.B. Shelley, 1792-1822) とを会わせ、両者の作品を *Examiner* に掲載した。1822 年、イタリアにいたパイロンを訪ねたが、彼に飽きたらなくなり帰国。1834-35 年には *Leigh Hunt's London Journal* を出版したが、晩年は不遇であった。批評家として、シェリーやキーツの才能を早く認めた。著作に *A Legend of Florence* (1840)、*Imagination and Fancy* (1844) などがある (『岩波 世界人名大辞典』岩波書店、2013、2188 頁)。

- 8) *London and Westminster Review* の出版は、以下のような社会・経済・政治状況のもとになされた。「1820 年代初頭のイギリスは、流動する社会経済状態のなかで、改革をのぞむ民衆の声を反映する多くの新聞・雑誌やパンフレットががつぎつぎに出され… 急進派のものから現体制擁護の保守派のものまで、種々の政治的立場に色どられた出版物があらわれた。… とりわけトーリーとウィッグの二大政党と結びついている『クォーターリー・レビュー』(*Quarterly Review*) と『エディンバラ・レビュー』(*Edinburgh Review*) との影響力は大きいものがあつた。だが今やこの両誌とも、改革を強くもとめる世論の動向をくみ上げることはむづかしくなつてきた。… こうした世論にこたえて 1824 年 1 月に創刊された季刊誌が『ウェストミンスター・レビュー』(*Westminster Review*) なのである。「急進派の有力な選挙区の地名を冠してあらわれたこの雑誌は、ベンサム (1748-1832 年) が出資し、その信奉者パウリングが主筆となつてスタートしたが、実質的な中心人物はジェームズ・ミルであつた」(杉原四郎『杉原四郎著作集 II 自由と進歩 ■ J.S. ミル研究 ■ 藤原書店、2003、176-77 頁)。「彼 [パウリング] は父 [J. ミル] が政治的、哲学的な評論誌を運営にふさわしいと考えていた人物とは全く違う人物であるという強固な意見を抱くには十分なほど知つていたので… この企画の前途を危ぶみ、非常に憂慮してゐた。しかし、… 創刊号に論説を書くことを承諾した。… 父の論説 [“*Periodical Literature: Edinburgh Review*,” vol. 1, Jan.1824] は、[リベラルな]『エディンバラ・レビュー』の創刊号以来の全面的な批判になつた」。この父の論説執筆に際して J.S. ミルは「父が検討したいと望みそうな論文についてノート」を作つたし、ほぼ毎号論文を寄稿した (山下重一訳註前掲書、150 頁、193 頁注 26)。

ミルは「哲学的急進主義」の党派に「効果的な援助と与えると同時に、刺戟をも与えることができそうな… 企画の一つ」が『ウェストミンスター・レビュー』が果たそうとしていた役割に代わる哲学的急進主義の定期的な季刊誌を創刊することであつた。… 1834 年の夏になると… 資金面だけでなく、文筆によつてもこの企画を援助することが出来るウィリアム・モールスワース卿 (William Molesworth, 1810-55) が、私 [J.S. ミル] が表面上主筆になることはできないとしても、実質上の主筆を引き受けるならば、評論誌を創刊しようとするに自発的に申し出た。このような提案は、拒絶すべきではなかつた。こうして、評論誌は創刊されたが、初めは『ロンドン・レビュー』と名乗り、後にモールスワースが『ウェストミンスター・レビュー』の所有者であつたトムソン大佐から同誌を買収し、両誌を合併して、『ロンドン・アンド・ウェストミンスター・レビュー』と名乗つた (山下重一訳註前掲書、276-77 頁。詳細は、以下の文献を参照のこと。W.E. Houghton and E.R. Houghton, *op. cit.*, pp.528-58)。

[EL, no. 512A]

To an Unidentified Correspondent⁹⁾

India House¹⁰⁾

Saturday

Dear Sir – There will be no necessity to have this recopied but if Mr Parker¹¹⁾ will be so good as to sign another similar to it, I will sign them both the first time I see you & each of us can keep one. We can also at the same time, sign in duplicate the agreement respecting the Logic.¹²⁾

Yours very truly

J.S.Mill

-
- 9) おそらく、以下に指摘する理由からパーカー社関係者への書簡であろう。
- 10) 彼の東インド会社への就職は 1823 年 5 月であり、「通信部の父に直属する勤務先を与えてくれたことによって、私の生涯の 35 年間続いた職業と地位が決められた」(CW, vol.I, p.82 〈83〉、山下重一訳註前掲書、130 頁)。それ以降、1851 年秋ミル一家がブラックヒース・パークに一軒家を借りるまでの間、例外はあるものの、書簡の多くはこの東インド会社が発信地となっている。
- 11) John William Parker (1792-1870) は、出版業のマネージャーを経て、1829 年ケンブリッジ大学出版の管理者となり、1832 年に出版社を起し、キリスト教知識協会 (Christian Knowledge Society) の出版社に指名された 1830 年、マガジン (William Maginn, 1793-1842) によって創刊された *Fraser's Magazine* の出版を、1847 年 7 月からパーカーを出版者として、その息子 (1820-60) を編集者として引き受け、J.S. ミル、バックス、ヒューウエル、ホエトリーなどが投稿者となった (*The Wellesley Index to Victorian Periodicals, 1824-1900*, vol II, pp.303-19)。
- 12) 『自伝』によれば、*A System of Logic Ratiocinative and Inductive Being a Connected View of the Principles of Evidence and the Methods of Scientific Invention* の出版がパーカー社に決定した理由以下のように書いている。「1838 年 7、8 月に、第 3 巻の初期草稿の中でまだ未完であった部分を書くための時間を見出した」。「1841 年末には、書物として印刷する準備が整ったので、マリ－氏に話しを持ちかけたが、彼は、この時期に刊行するには遅過ぎるまで抱え込んだ上、断ってきた。その理由は、最初にそう言えるはずだったものであった。しかし、原稿をパーカー氏に廻して、1843 年春に刊行されたから、一度断られたことを後悔してはいない」(CW, vol.I, pp.228 〈229〉-230 〈231〉、山下重一訳註前掲書、325-26 頁)。
- マリ－ (John Mury, 1778-1843) への書簡の中で「返事がなかなか貰えず、最後には、刊行してくれないならば、原稿を返却するように督促している」(山下重一訳註前掲書、396 頁、CW, vol.XIII, pp.493-34, pp.497-98 & p.500)。また、パーカーが『論理学』の原稿をテイラー (William Cooke Taylor, 1800-49) に読んで貰い、その上で出版することに決めた

経緯については以下の書簡を参照のこと (CW, vol.XIII, pp.505-06, 514-15)。

『論理学』初版出版後、1846 年 (第 2 版)、1851 年 (第 3 版)、1856 年 (第 4 版)、1862 年 (第 5 版)、1865 年 (第 6 版)、1868 年 (第 7 版)、そしてミル生前の最終版 (第 8 版) が 1872 年に出版された (CW, vol. VII, p. lxxix)。この『論理学』に関する合意書への調印が何版のものであるかは、現在のところ確定はできない。ただし、以下で示す理由からは第 3 版の改訂に関するものと推定できる。

CW に現在収録されているパーカー宛書簡の内、初版出版 (1843 年春) 後で『論理学』に言及した書簡は以下のものである。① Letter 512 (India House / 27th October, 1847 : CW, vol.XIII, p.723)、② Letter 322 (Aug. 5, 1858, vol.XV, p.568)、③ Letter 529B (Saint Véran, Avignon / Jan. 25, 1862 : CW, vol.XXXII, pp.129-30)、④ Letter 533 (Saint Véran, Avignon / Jan. 29, 1862 : CW, vol.XV, pp.774-75)。

この Letter 512 でミルは「先だって私があなたに『経済学原理』について、私たちの契約は『論理学』と同じでいいという提案を急いで書いたので、その契約自体について触れなかった。『論理学』の契約は将来のすべての版に対するものであったという事実を知らなかった。今回の場合、私は将来を縛ることを望んでいないし、初版だけの契約にしたい。『経済学原理』が受け入れられるかどうかにかかわらず、将来にかかわる問題は将来に委ねたい」(傍点は筆者によるものである) と書いた。事実「『経済学原理』の売れ行きがよかった … 1,000 部の初版は、1 年もたたない中に売れ切れてしまった」(CW, vol.I, p.242 <243>、山下重一訳註前掲書、335 頁)。

この「『経済学原理』は … 何等かの重要性を持つどの著作よりも早く書き上げられた。着手したのは、1845 年秋であったが、1847 年末には印刷に廻す準備が整って」(CW, vol.I, p.242 <423>、山下重一訳註前掲書、334 頁) いたため、このような『経済学原理』の出版条件の交渉がその年の 10 月に始まった (出版は 1848 年)。この交渉と同時に、『論理学』の契約についてミルとパーカーとの間に交渉がなされた可能性を示すのが、この書簡であろう。すでに『論理学』はその第 2 版が、前年の 46 年に出版され、その際に『論理学』の契約が「将来のすべての版」に対するものであったことを、あらめてミルは知ったのであろう。

このことから考えると、本書簡はパーカー社の関係者宛書簡で、日付の確定は困難なものの Letter 512 (27th October, 1847) に続く書簡であると推定できる。他のパーカー宛書簡にはこのような出版契約交渉を示しものは含まれていない。おそらくこの『経済学原理』の成功が、その後 *On Liberty* (1859)、*Thoughts on Parliamentary Reform* (1859)、*Considerations on Representative Government* (1861)、*Utilitarianism* (1863) などの出版物がパーカー社から出版された理由の一つであろう。

[LL, no. 293A]

To an Unidentified Correspondent¹³⁾

[DELARUE / &Co. / London]¹⁴⁾

East India House

Oct. 21, 1857

Sir

In answer to your note received yesterday, I beg to say that I shall be happy to receive from you the work which you do me the honour to offer. There are few persons less sensitive to attacks on anything they write, than myself, or more desirous to profit by any, even hostile, criticism, which I do not expect that I shall find yours to be. I cannot however undertake always to discuss with my critics our differences of opinion, which on subjects like those in question are generally too deeply grounded in our respective modes of thought, to afford much hope of their being removed by controversy. I am Sir

Y[ou]^r ob[edien]^t Serv[an]^t

J.S.Mill

13) 宛先については、二人が考えられる。一人は、この書簡（一葉）が添付されている台紙に、“From Stuart Mill to Rev. Alfred Lyall” と書かれているライアルである。これが正しいとすれば、ライアルの著書 *Agonistes; or, Philosophical Strictures, suggested by opinions, chiefly, of contemporary writers* (1856) 拝受への感謝の書簡ということになる。ただ、その台紙の裏面には、“Mathew Arnold Prof Critic [...] to Mrs Robert Labb” 等のメモが書かれていることからすると、この台紙にかかれた差出人・受取人のメモがこの書簡の差出人・受取人を示したものでどうかは確定できない。なお、編集者で著作者である Alfred Lyall (1795-1865) 宛て書簡は CW には収録されていない (LL, vol.XIV, p.293 note. 10.)。なお、彼には以下の著作がある。 *A Review of the Principles of Necessary and Contingent Truth, in reference chiefly to the Doctrines of Hume and Reid* (1830)。

他の一人は、カールトン (Henry Carleton, 1785-1863) である。1857 年 10 月 12 日付けのカールトン宛書簡 (Letter 293: 発信地 E[ast] I[ndia] H[ouse]) で、カールトンの著書 *Liberty and Necessity; in which are considered the laws of association of ideas, the meaning of the word will, and the true intent of punishment* (Philadelphia, 1857) を拝受したことを告げた際、ミルは “The little volume which you did me the honor to send me, arrived safely...” と書いたが、この書簡でも改めて “I shall be happy to receive from you the work which you do me the honour to offer.” と書いている。このことから考えると、この書簡がカールトン宛て書簡である可能性もある。ただ、この書簡の冒頭に書かれている “your note” が具体的にどのようなものであったか不明である。後に彼は *Essay on the Will* (1863) を執筆している。

この「[自由と必然という] 主たる問題についてあなたに完全に同意するだけでなく、主たる心的現象に応用された連合法則についての要領を得た、非常に有益な説明と例証に感謝しなけ

ればなりません」と感想を述べた (*The Later Letters of John Stuart Mill 1849-1872*, II, CW, vol.XV, pp.540-41.)。この「自由と必然」問題について、「われわれの性格は、環境によって形成されるのであるが、われわれの欲求がそのような環境をつくり出すのに大いに役立つ」という「自由意志の理論」は「環境の理論と完全に両立するだけでなく、むしろ正当に理解された環境の理論そのものなのである」と述べ、「それは、今では、私の『論理学体系』の最終巻の『自由と必然』の一章となっている」。これによってミルは「因果関係の理論に関する名辞としての必然性ということが、人間の行動に適用される際に、間違った連想を伴う」ために「誤解の招き易い必然論という用語を全く使わないようになった」という (山下重一訳註前掲書、229 頁)。このような事情から考えると、この書簡はカールトン宛書簡である可能性が高い。なお、*Indexes to the Collected Works* (CW, vol.XXXIII) によれば、1854 年 4 月 3 日のハリエット宛て書簡で、彼は自分の『論理学』や父ミルの『人間精神の分析』、とくに自由と必然の理論に興味をもっているが、経済学には興味はない、と伝えている (*The Later Letters of John Stuart Mill 1849-1872*, I, CW, vol.XIV, p.193, note 2)。このことから、カールトンはその主著を出版する前から、ミルと連絡をとっていたと思われる。また、*Additional Letters* (CW, vol.XXXII) にもカールトンの書簡は収録されていない。

- 14) この便箋は、1821 年にトーマス、デ・ラ・ル (Do La Rue, Thomas, 1793-1866) が創立した文房具・印刷工・小問物屋であるデ・ラ・ル製であり、その会社名と住所とを含む文様とが浮き出し印刷 (emboss) されている。

[LL, no. 324A]

To an Unidentified Correspondent

[EAST INDIA HOUSE]¹⁵⁾

Sept. 16, 1858

Sir

I have received your note on the subject of a meeting to be held in October “to inaugurate the union of the middle and working classes” for the promotion of Parliamentary Reform.¹⁶⁾

I beg to say in reply that I have not seen any scheme of Parliamentary Reform intended to unite the middle and working classes, which I approve sufficiently to desire to promote it. In none of them is the franchise grounded on an educational qualification; they all deny votes to women; and they all involve, as a primary condition, the ballot, to which I am on principle opposed. I am Sir,

Y[ou]^{rs} faithfully

J.S.Mill

- 15) 東インド会社名の入ったエンブレムが浮き出し印刷 (emboss) された letterhead である。
- 16) 1858 年 2 月にダービー伯爵は第二次ダービー内閣を組織し、下院内総務にディズレーリを据え、彼の主導で選挙法改正に取り組んだ。1859 年 2 月にディズレーリが下院に選挙法改正法案 (この改正案にはミルの主張した複数投票権は含まれていない) を提出したものの保守派からは選挙権を拡大しすぎると批判され、一方急進派からは選挙権拡大が手ぬるすぎると批判されて 4 月 1 日に否決され、解散総選挙をしたものの、過半数を取れず、解散した。このような政治状況の中で、ミルは『議會改革所感』(1859) と題するパンフレット (その骨子を詳細に敷衍したのが、『議會改革に関する考察』(*Thoughts on Parliamentary Reform*, 1861) である (山下重一『J. S. ミルの政治思想』木鐸社、1976 年、194 頁))。

その中で、「いささか率直に、労働者階級は、嘘をつくことを恥じるという点では他のいくつかの国の労働者と異なっているとはいえ、やはり一般的に嘘つきだと書いた。或る反対者は、この一節をプラカードに書いて、主として労働者階級で構成されていた或る集会 [1865 年 3 月の総選挙立候補演説] で私に手渡し、私にあなたはこんなことを書いて公表したのかと問い質した。私は、直ちに『その通り』と答えた。私がこう言うや否や、全集会に熱狂的な賞讃の歓声がとどろいた。… 彼等が望んでいるのは友人であって、媚びへつらう人ではない、自分が真剣に矯正してもらいたいと信じていることを何でも労働者に告げてくれる人に恩義を感じると言った」(山下重一訳註前掲書、368 頁)。労働者の友人となろうとした「彼 [ミル] に対する労働者の信頼の強さ」は、ミルが下院議員となった 1866 年の会期の最大の争点「選挙法改正法案」をめぐって起こったハイド・パーク事件においても貫かれた (山下重一前掲書、233-37 頁)。とはいえ、ミルは 1866 年に設立された「この連盟 [選挙法改正連盟]」に加入することを辞退していたが、私が公言した理由は、この同盟が掲げていた男子普通選挙権と無記名投票の綱領に賛成できないということであった。私は無記名投票には全面的には反対であったし、男子普通選挙権… [が]、女性を除外しようとする意図でないと保証されたとしてさえも、… 一つの原理に立脚しているのであるならば、その [女性選挙権を含む男女平等] 原理全体を示されなければならないからである」(山下重一訳註前掲書、373 頁)。この「改革を促進したのはバンタム主義者やマンチェスター自由貿易派であった」(中村英勝『イギリス議会史』新版、有斐閣双書、1984、113 頁) が、その一人ブライト (John Bright, 1811-89) は「穀物法廃止に成功したのちも、議会改革… [など] 議会改革運動のリーダー格」となった (前掲書『岩波西洋人名事典』2382 頁)。

ブライトは 1859 年 4 月の選挙でロッジデール自治区で下院議員に選出され、1859 年 8 月 17 日および 18 日そのロッジデールで議会改革に関する演説をした。その 18 日の演説の中で中産階級と労働者階級の利害は対立するものではないと主張し、両者の結束を促す演説をした (John Bright (edited by J.E.T. Rogers), *Speeches on questions of public policy*, 1868, vol.2, p.547)。また、ミルが選挙法改正案に対して女性に選挙権を認める動議を出した際 (1867 年 5 月 20 日) に、ブライトはその動議には賛成した (山下重一訳註前掲書、381、428 頁)。このようなブライトの選挙法改革に対する姿勢を考えると、この集会開催の通知を送ったのは、ブライトの関係者であろう。なお、1857 年 10 月「国民の改善のために、幸運にも今まさに始められようとしている様々な」あらゆる努力に従事している人びとに、社会経済学を包括

的に考えようとする機会を与える」「イギリス社会科学振興協会」の第 1 回大会がバーミンガムで開催され、その第一部会が「立法・法改正部会」であった。58 年の第 2 回大会はリバプールで開催された。この協会を支えていたのは、中産階級であった（井上琢智「イギリス社会科学振興協会（1857-86）—その歴史—」『久保博士記念 上ヶ原 37 年』創元社、1988、199-213 頁）。

【LL, no. 599A】

To an Unidentified Correspondent¹⁷⁾

Blackheath

March 14, 1863

Dear Sir

I am much obliged to Mr McMillan¹⁸⁾ for sending me Mr Freeman's book.¹⁹⁾ I intend reading it as soon as I have time, and I hope that this will be before long, I cannot however hold out any prospect of my reviewing it / in fact I have already declined a proposal to do so / as the history of the Achaian league,²⁰⁾ though as a part of Greek history I am strongly interested in it, is not a subject on which I am competent to write.

I am Dear Sir

Y[our]^s very truly

J.S.Mill

17) 宛先は現在のところ不明である。この書簡の本文開始頁右上に、ミルとおそらく異なる筆跡で“John Stuart Mill”とメモ書きされている。また、ミルのおそらく私箋であることを示す文様とは異なる文様が浮き出し印刷 (emboss) されている。

18) Alexander MacMillan (1818-96) は、兄のダニエル (Daniel, 1813-59) とともに 1844 年、ケンブリッジで出版社マクミラン社を設立し教科書で成功した。弟は、63 年にロンドンに出版社を移し、ニューヨークにも支店を設けた（『岩波 世界人名大事典』岩波書店、2013、2731 頁）。また、*Macmillan's Magazine* (1859-1900) の経営者であった。

19) Edward Augustus Freeman (1823-92) はオックスフォード大学トリニティ・カレッジ卒業、同大学歴史学欽定講座教授 (1867-79)。主著 *History of the Norman Conquest* (1867-79) はアングロ・サクソンの伝統の連続性を強調し、歴史における地理的要素を重視した（『岩波 世界人名大事典』2433 頁）。ギリシャやローマ史にも言及した。

A. マクミランを通じてミルに送られたフリーマンの著書は、おそらく *History of Federal*

Government, from the foundation of the Achaian League to the Discription to the United State (1867)であろう。ミルは *Considerations of Representative Government* (1861) の第3版 (1865) で注として本書を追加している (CW, vol. XIX, p. 555)。この書簡で書かれているように、マクミランから送られて同書を読んだ結果であろう。なお、フリーマンは “The Morality of Field Sports.” (*The Fortnightly Review*, n.s. vol.VI, Oct., 1869, pp.353-85) の中で、動物への不当な虐待を与えるものとして狩猟を批判した (CW, vol.XVII, pp.1673-74, n.2)。

- 20) このようにフリーマンは、ギリシャ南部の地方であるアケイアに言及するなど、ギリシャやローマ史に関する著書を著した (*The National Union Catalog; Pre-1956 Imprints*, vol.184, 1971, p.58)。

[LL, no. 970A]

To E. B. Eastwick / W. J. Eastwick²¹⁾

[BLACKHEATH PARK]²²⁾

July 10, 1866

My dear Eastwick

It is a pity that you should be put to the trouble of coming here, merely for a short talk, especially as I shall be from home most days this week, and very much occupied when at home. But I could call at the India office almost any Monday or Thursday after this week, at half past ten or eleven, only I have fancied that it was useless going there so early. I will either take my chances of finding you at the office, or meet you there any Monday or Thursday morning you like to appoint.

I am Dear Eastwick

Yours very truly

J.S.Mill

21) Edward Backhouse Eastwick (1814-83) は、イギリスの外交官で、東洋学者。オックスフォード大学を卒業後、ボンベイ (現ムンバイ) の連隊に入ったが、文官に転じ、東インド会社のヘイリーバリ校のヒンドウスターニー語教授 (1845)。1868-74 年の間、保守党所属の下院議員を務めた (『岩波 世界人名大事典』195 頁)。彼はジョン・ブライトの弟ジェイコブ (Jacob Bright, 1821-99) とともに婦人参政権運動を支援した (CW, vol. XVII, pp.1917-18)。

1865 年、下院議員に選出されたミルは、1866 年に婦人参政権の請願を下院に提出し、翌年 5 月 20 日、婦人参政権を要求して下院で演説をし、1868 年 11 月の選挙でミルが下院議員選挙で落選した。1869 年になると *The Subjection of Women* を出版した。この頃は全国各地に婦人参政権運動の組織がつくられたが、1871 年には、パトラーの「性病法」の撤廃運動をめぐり運動内部が分裂し、1873 年のミルの死により運動は大打撃をうけた。ミルの下院での婦人参政権運動を引き継いだジェイコブ・ブライトも、運動の分裂の結果、1874 年には落選したが、1877 年、ブライトが再度当選した頃から、運動に統一の兆しがみられ、1883 年に第 5 版が出版された翌年の 1884 年には第三次選挙法改正の高まりがみられ、女性のあいだでも婦人参政権の実現が期待されるようになった（水田珠枝『ミル「女性の解放」を読む』岩波セミナーブック 9、岩波書店、1984、59 頁）。なお、この宛名については、兄の W.J. Eastwick (1808-89) の可能性も否定できない。ただ、現在 CW に収録されているミル書簡には、直接この兄弟へ送った書簡は含まれていない。兄弟に言及されている書簡は、兄の場合、“March 9. [1854]” (CW, XIV, p.181) および “3rd August 1858” (vol.XXXII, p.112 〈ただし、“Indexs to the CW,” には、p.113 も掲げられているが、同頁には言及がない〉)。弟の場合、“Nov. 5. 1872” (vol.XVII, pp.1917-18) だけである。

22) ミルのおそらく私箋であることを示す文様が浮き出し印刷 (emboss) され、住所が印字された letterhead である。

[LL, no. 1082A]

To C. E. Rawlins

[Blackheath Park]²³⁾

May 15, 1867

Dear Sir

There is a good deal to be said for the suggestion that an occupier in a borough should be allowed to make his choice between the county and the borough if qualified for both; but so novel a proposal would have no chance of being adopted, and the principle involved in it would, I think, be more usefully discussed on a larger scale.

I am Dear Sir

Yours faithfully

J.S.Mill

C. E. Rawlins Jun[io]^r Esq²⁴⁾

- 23) ミルのおそらく私箋であることを示す文様が浮き出し印刷 (emboss) され、住所が印字された letterhead である。
- 24) ローリングズ (C. E. Rawlins Junior Esq.) は、リベラルな下院議員で、ミルと同様、マルティノー (James Martineau, 1805-1900) の友人である。

【LL, no. 1096A】

To an Unidentified Correspondent²⁵⁾

[Blackheath Park]²⁶⁾

June 2, 1867

Dear Madam

Your letter has been sent as you desired, to the Pall Mall Gazette,²⁷⁾ but it has not been inserted and probably will not be inserted by the Editor.²⁸⁾ It was probably from a foresight of that result that you wished it to pass through my hands; and I am glad to be able to add yours to the many strong adhesions I have received from women of almost all classes and ranks. I hope and believe that in the rapid progress of this question, the time is near at hand when no woman will feel it necessary to reserve her name for the private encouragement of those who are moving actively and publicly in the cause of women. I am

Dear Madam

very truly yours

J.S.Mill

25) 1867年6月10日のミルのテイラー (Helen Taylor, 1831-1907) 宛書簡【Letter, no.1100】(CW, vol.XVI, p.1281) で「*Pall Mall Gazette* があなたの書簡を掲載することを願っている」と書いた。実際には、この書簡は公刊されなかったが、1867年6月17日付の *Pall Mall Gazette* (p.5) に「下院に提出された婦人参政権運動に賛成する立場から書簡の要約として公表された」(note 2)。この書簡の8日前に出されたこの書簡で、ミルがこの女性からの書簡を編集者に送ったが、おそらく掲載されないだろうと書いている。当時「私の娘ミス・ヘレン・テイラーは、選挙権を女性まで拡大するための団体を結成する時が来たと考えた〔婦人参政権国民協会で、ミルが名誉会長を務めた〕…最初の数年間は運動の中心人物であった」(山下重一

訳註前掲書、382 頁)。これらのことから判断すると、おそらくこの書簡の宛先は娘のテイラーであろう。なお、この協会に関係する女性については、【Letter, no.1104】(CW, vol.XVI, p.1284)をも参照のこと。

- 26) ミルのおそらく私箋であることを示す文様および住所が浮き出し印刷 (emboss) された letterhead である。
- 27) ペル・メルは、イタリアで始まりヨーロッパ各地で流行した球技・ペルメル (直径 6 センチあまりのボールを 122 センチの枝をもつ木槌で草原を転がす競技) がこの地で初めて行われたことから付けられた地名である。1560 年頃にはこの地は大草原で、この競技をするに適したところであった。17 世紀になると高級住宅街となり、18 世紀には J. スイフト (1667-1745)、E. ギボン (1737-94) が住人となった (渡辺和幸『ロンドン地名由来事典』1998、鷹書房弓プレス、204-05 頁)。この地は「ジェントルマンの図書室に欠くことのできないあらゆる本、さらには彫刻類や版画を供給する本屋街として知られ」(R.J. ミッチェル・M.D.R.. リーズ著・松村起訳『ロンドン庶民生活史』みすず書房、[1971] 1979、142 頁) ようになった。

The Pall Mall Gazette は、1856 年「安い新聞を大衆の手に」を目的としてロンドンで最初に刊行された日刊紙 (夕刊紙) として刊行された。同紙の「所有者はたびたび変わったが」(磯部佑一郎『イギリス新聞紙』ジャパン・タイムズ、94 頁)、1865 年から 80 年までの所有者はスミス (George Murray Smith, 1824-1901) であった。彼は「ヴィクトリア時代に出版者の内、もっとも有能でもっとも創造的な出版者」であり、*Cornhill Magazine* を 1860 年に刊行し、初代編集長 (1860-62) にサッカー (W.M. Thackeray, 1811-63) が就いた (“The Cornhill Magazine, 1860-1900,” *The Wellesley Index to Victorian Periodicals, 1824-1900*, vol.I, pp.321-24. 『岩波 世界人名大事典』1085 頁)。

- 28) 1865 年から 80 年までの *The Pall Mall Gazette* の主筆は、グリーンウッド (Frederick Greenwood, 1830-1909) で、*The Cornhill Magazine* の共同編集者 (CW, vol.XXXII, p.193) であり、この時代の同紙は保守的な新聞であった。このことが、テイラーの原稿が全文掲載されず、要約に留まった理由であろう。もっともその後 1889 年にステッド (W.T. Stead, 1849-1912) が主筆になると「不動の姿勢で“新聞による政治”の彼の理論をフルに展開し、特に長年の社会悪として社会改革派を悩まし続けた、幼児の人身売買、国際的な白人醜業婦の売買防止のため、痛烈な論陣を張り、「近代ジャーナリズムの基礎を築いた。タイタニック号事件により没」(磯部佑一郎前掲書、95 頁。『岩波世界人名大事典』1404 頁) した。

【LL, no. 1106A】

To an Unidentified Correspondent²⁹⁾

Mr Mill presents his compliments to Mr. Frederick Hendriks,³⁰⁾ and begs to say that Mr. Wilenski's work³¹⁾ has duly reached his hands.

Blackheath Park³²⁾

June 30 1867.

- 29) ミルのおそらく私箋であることを示す文様が浮き出し印刷 (emboss) された letterhead である。
- 30) Frederick Hendriks (1827-1909) は、いろいろな保険会社の保険数理士 (actuary) であり、王立統計協会の副会長を務めた。彼の著書 *Decimal Coinage: A Plan for Its Immediate Extention in England in connection with the International Coinage of France and Other Countries* (1866) について、ジェヴォンズ (W.S. Jevons, 1835-83) は「イギリスでこの問題をよく知らせることになった最初の優れたパンフレット」だと高く評価した (*Money and the Mechanism of Exchange*, 1878, p.172)。ジェヴォンズとヘンドリックスとの交流を示す書簡については、井上琢智「W.S. ジェヴォンズとラテン貨幣同盟—ジェヴォンズと F. ヘンドリックス—」『経済学論究』(関西学院大学) 第 48 巻第 3 号 (1994 年 10 月、481-94 頁)、およびジェヴォンズがヘンドリックスに送った関西学院大学図書館所蔵の書簡を翻刻・収録した井上琢智「W.S. ジェヴォンズと F. ヘンドリックス—ジェヴォンズの未発表 8 通の書簡について—」(同誌第 48 巻第 4 号、1995 年 2 月、87-98 頁) を参照のこと。なお、この書簡 (メモ) は、書籍等にのり付け等された形跡が残されている。
- 31) Mr. Wilenski's work が具体的にどのような著作を示すか不明である。 *The National Union Catalog, Pre-1958 Imprints* (1979), vol.663, pp.505-09 にも登録されていない。
- 32) この書簡は、三人称で書かれているが、その筆跡と発信地からミルのヘンドリックス宛書簡と推定できる。1867 年 6 月 30 日のミルの J.E. ケアンズ宛【Letter, no.1104】およびミルの G.J. グラハム宛【Letter, no.1106】はともに、Blackheath Park から送られている (CW, vol.XVI, pp.1283, 1106)。

[LL, no. 1242A]

To S. Sterne

[Blackheath Park,
KENT]³³⁾

May 20, 1868

Dear Sir

I am engaged to go into the country on Saturday but if you could come down and dine with us on Sunday I should be very happy to see you. We dine at five, and there is a train by the North Kent Railway from Charing Cross at five minutes past four which will take you down at the Blackheath station. Our house is the last but one at the further end of Blackheath Park, and is about ten minutes walk from the station. I am

Dear Sir

very truly yours

J.S.Mill

S. Sterne Esq³⁴⁾

-
- 33) この書簡の第一葉の左面に“From / J.S. Mill / May 20 / [18]68”との古書店等のメモ書きがある。また、本書簡は、ミルのおそらく私箋であることを示す文様が浮き出し印刷 (emboss) され、住所が印字された letterhead である。
- 34) Simon Sterne (1839-1902) はアメリカの法律家で経済学者。ハイデルベルグ大学で学び、1859 年ペンシルバニア大学法学部を卒業し、1860 年ニューヨークで法定弁護士となった。1863 年から 64 年にかけて商業アドバイザー (the Commercial Advertiser) のスタッフとなり、1864 年アメリカ自由貿易リーグ (the American Free-trade League) の創立者となった。翌 65 年に *Social Science Review* を創刊し、1870 年には「70 人委員 the Committee of Seventy」の書記に選出された (John Foord, *The Life & Public Services of Simon Sterne* (1903) pp.1-15.)。著書に、*Representative Government and Personal Representation* (Philadelphia, 1870)、*Suffrage in Cities* (1878) *Constitutional History and Political Development in the United States* (New York, 1882; 4th ed., 1888) などがある。

[LL, no. 1412]

To H. Reeve

[Blackheath Park,
KENT]³⁵⁾

March 22 [1869]

Dear Sir

I was much surprised at what seemed like a proposal on your part to write reviews both of the Trades Union Commission Report and also of Mr. Thornton's book, and I am not at all surprised to find that your meaning was to include a review of both in one article. This, however, will not suit me, nor indeed could I undertake a review of the Trades Commission Report even separately, for a considerable time to come; and I do not intend to defer writing on Mr Thornton's book until I write on the Trades Commission Report. For this and various other reasons, with

many apologies for the trouble I have given you, I decide to withdraw my proposal altogether. I am much obliged to you for your willingness to insert an article by me on a subject on³⁶⁾ which there are considerable differences of opinion between us, and remain. Dear Sir

yours very truly

J.S.Mill

Henry Reeve Esq

35) この【Letter no.1412】は“The Later Letters 1849 to 1873,” (CW, vol.XVII, p.1582) に収録されている。ミルのおそらく私箋であることを示す文様が浮き出し印刷 (emboss) され、住所が印字された letterhead である。また、便箋の 1 枚目の左側 (右から、書簡本文が始まる) には、“Mill as to Review of Thornton.” と書かれている。なお、関西学院大学図書館は、ミルの論文 “On Thornton’s on Labour and its claims,” (*Fortnightly Review*, May and June 1869) の草稿を所蔵している (請求番号：081：128：223)。

36) トロント版では、この “on” は、“in” と読んでいる。

【LL, no. 1431】³⁷⁾

To R.S.Cree

Avignon

May 17, 1869

Dear Sir

I thank you for your letter as I am always glad to have my opinions and arguments subjected to the criticism³⁸⁾ of any one who has studied the subject. It appears to me, however, that your remarks do not touch the scientific exactness of the propositions laid down in my article in the *Fortnightly Review*, but only the practical importance of the cases to which they are applicable. Now, though I am far from agreeing with you as to this, I have not discussed it in the article. My object, on this occasion, was to show that the door is not shut on the discussion of the³⁹⁾ subject, by an insuperable law of nature.

It is one thing to say that labourers by combination, cannot raise wages (which is the doctrine of many political economists) and another to say that it is not for their interest to force up wages so high as to reduce profits below what is a sufficient inducement to saving and to the increase of capital.

I have written a second article on the subject, which will be printed in the next number of the Fortnightly, and which, though it will not satisfy you on all points, will, I think, show you that I do not disregard either the moral or the prudential obligations of Trades Unions. I am Dear Sir

Yours very faithfully

J.S.Mill

R.S.Cree Esq

37) この【Letter no.1431】は“The Later Letters 1849 to 1873,” (CW, vol.XVII, p.1602) に収録されている。ミルのおそらく私箋であることを示す文様が浮き出し印刷 (emboss) された letterhead である。

38) CW では、この “criticism” と “criticisms” と複数として読んでいる。

39) CW では、この “discussion of the” は、読み飛ばされている。

【LL, no. 1790A】

To F. Harrison⁴⁰⁾

[10 ALBERT HALL MANSIONS

VICTORIA Street

S.W.]⁴¹⁾

20th March 1873

Dear Mr Harrison

Will you and Mrs Harrison do us the pleasure of dining with us here on Friday (March 28th) at seven o'clock?⁴²⁾ I am

Dear Mr Harrison

very truly yours.

J.S.Mill

-
- 40) Frederic Harrison (1831-1923) はコント主義者で、『デイリー・ニューズ』にエア (E.J. Eyre, 1815-1900) を批判する戒厳令の違法性に関する論説を連載した (山下重一訳註前掲書、426 頁)。1865 年 10 月 11 日、英領ジャマイカで黒人の反乱が起り (ジャマイカ事件)、首謀者とされたボーグルや宣教師ゴードンも煽動者して処刑された。エア総督の行動の是非をめぐって王立委員会が現地に派遣され、調査報告書が提出された。また、下院にジャマイカ委員会が結成され、ミルも参加した (山下重一訳註前掲書、424-26 頁 注 105-112。なお、山下重一『ミルとジャマイカ事件』〈御茶の水書房、1998) も参照のこと)。この委員会についてミルはその「最も活動的な委員は、自由の原理のすべての主張に当たって、最も誠実で活動的であった、下院議員のテイラー氏、ゴールドウィン・スミス氏、フレデリック・ハリソン氏、スラック氏、カメロヴゾフ氏、シェーン氏、そして、委員会の名誉書記、クレッスン氏であった」と書いた。この委員会の委員長がバクストン (Charles Buxton, 1823-71) で、辞任後ミルが委員長に満場一致で選出された (CW, vol.I, pp.281-82。山下重一訳註前掲書、378 頁、424-25 頁)。また、ハリソンの妻は、Ethel Bertha Harrion であり、夫と同様、コント主義者で作家であった。
- 41) ミルのおそらく私箋であることを示す文様および住所が浮き出し印刷 (emboss) された letterhead である。
- 上段には “le 8 mai 1873 / une des dernières lettres / du philosophe” とのメモが、下段には “John Stuart Mill / 1806-1873 / Philosophe et économiste / anglais” とのメモが書かれている。おそらく古書店等によるメモであろう。なお、この翻刻には、大田一廣氏のお世話になりました。記して感謝いたします。
- 42) 1873 年 4 月 13 日のミルのハリソン宛 Letter 1800 でも「次の水曜日 7 時に自宅とともに夕食ができないか」と招待している (CW, vol.XVII, p.1949)。ミルの死 (1873 年 5 月 7 日) の 1 ヶ月弱前である。